

〈講演〉

転形問題論争をめぐるって

櫻井 毅

(武蔵大学名誉教授)

ただいまご紹介いただきました櫻井でございます。文献探索研究分科会で話をせよと言われまして、何分、大学行政の仕事をずっとやっていたもので、あまり研究をしてないものですから、うまくお話することがあるかなと思っていたのですが、せっかくの機会なので、何かお話ししようということで、ここに掲げましたように、「転形問題論争をめぐるって」ということで、文献探索とも少しは関係のある話をしようと考えております。

またここにあらかじめお配りしてある2枚の紙は、まったく思い付くままにメモのように書いておいたものをそのまま、印刷してもらいまして、みなさんのお手元にお配りしたものであります。それからあと2枚コピーがありますけれども、一つは岩波書店刊の『経済学事典』の第3版の「転形問題」という項目の拡大コピーでありまして、これはたまたま私が書いたものなので、これも転形問題とは何かということをお考えになる場合に参考にしていただきたいと思って準備したものです。あと一枚は『論争・転形問題』という本を私どもで東大出版会から大分前ですけれども出したことがあるのですが、その時に巻末に付けた文献目録をここに欧文のと日本語のものとを合わせて掲載したものです。やや古いものですが、これもご参考に供したいということでございます。

それで、転形問題と言いますのは、ちょっと聞き慣れない言葉かもしれないのですが、これを英語で言いますと、“Transformation problem”、そういうふうに言います。“transformation”というのは何かというと、これは実はマルクスの『資本論』の中における価値から生産価格への転形、その意味なんですね。そこから出発している

んですね。ドイツ語で“Verwandlung”というので、「転形」ではなく「転化」というふうに、ドイツ語から訳した『資本論』の日本語訳では、ほとんど「転化」、価値から生産価格への転化と訳しているのが普通なんですけれども、英語の訳だと“transformation”ということなので、論争が主として英語圏で行われているということもあって、そこからこの言葉が出てきているわけであります。

ですから当然のことということになりますが、これはマルクスの『資本論』の1巻と3巻の問題を扱った問題なんですけれども、あとでお話しますが、今では、これがマルクス経済学全体にかかわる問題として議論も拡大しているんですね。マル経、近経を問わずいろんな人が、有名なドップとかミークとか、あるいはサミュエルソンとか、ポウモールとか、森嶋さんだとか、そういう人たちもかなり初期の段階で参加していましたし、そういう人たちがたくさん参加して「ああでもない、こうでもない」と議論しまして、立場が皆違うこともあって、ますます問題がある意味で拡大してしまったきらいがあります。そのために結論めいたもの、決着というようなものがまだできてない。問題が多岐にわたっているために、また簡単にできることもないだろうということなのであります。まあ、そういう問題であるので、非常に広がりがあるって深い問題なものですから、そういうところいろいろな文献上の問題等々も出てきますので、これがご要望に多少でもかなうかなと思って上記のテーマを選んだ次第であります。

それで転形問題とは何かということですが、ここにはあまりご専門の方もいらっしやらないと思いますので、これ以上あまり詳しい説明——特にそのめんどうな理論的説明はいたしません、ごく簡単にいってしまえば、マルクスの『資本論』の中の価値から生産価格への転形についての説明に不十分なところが残っていて、そこからいろいろ問題が出てくるということなのです。あとで、もう少し説明することがあるかもしれませんが、とりあえずは先ほどコピーしてお渡ししてあります辞書の項目、あるいはそれに関係ある文献など、もし興味がある方はご覧いただければいいのではないかと思います。

それでこの転形問題論争がいつ始まったかということなのですが、1942年からだったかもしれません。といいますのは、その頃に

ですね、ポール・スウィージーという人が『資本主義発展の理論』という本を書きまして、これが出発点になったのです。これは翻訳でいいますと、都留重人さんが訳しています。もっともその前に中村金治訳が1951年に出しましたが、今そちらは絶版です。この本の原本がアメリカで1942年に出たときにスウィージーが、今いったようなそういう問題をその本の中の第七章で提起している。ですからその時が論争の発端になっているということが言えると思うんです。ドップが書いた書評あたりから論点が話題になってくるわけですからね。

スウィージーという人ですけど、1910年生まれで、まだお元気かと思いますが、アメリカの独立社会主義者で、長らく“Science and Society”という雑誌の主筆を勤めていました。もともとはハーバード大学の出身で、やがてシュンペーターにかわいがられます。シュンペーターはご承知のようにケインズと並び称される20世紀オーストリアの有名な経済学者ですね、これが欧州の戦乱を避けてアメリカに渡りまして、それでアメリカのハーバード大学の教授になります。そして、そこで非常にたくさんの弟子を育てたわけですけど、その助手になったのがスウィージーだったのです。しかし彼はマルクス経済学にどんどん傾倒していきまして、書いたのがこの『資本主義発展の理論』という本で、英語で書かれたマルクス経済学の最高入門書と当時言われていました。その頃アメリカはニュー・ディール期から戦争への時期で、ケインズ的な考え方、あるいはケインズ左派的な考え方、あるいはマルクス主義的な、マルクス経済学的な考え方、そういうものがアメリカにもだいぶ入ってきまして、そういう影響の中でスウィージーがこの本を書いて非常に有名になったというわけです。本当のところ、英語で書かれたマルクス経済学の本格的な解説書というのは、それまでほとんどなかったのです。ですから戦後の日本でもたちまち注目されました。

この本の中で、スウィージーがボルトケヴィチという人の論文を取り上げている。このボルトケヴィチという人は20世紀初頭のドイツの統計学者です。この人が20世紀の初めにドイツ語の雑誌に発表した論文がいくつかありまして、その論文の中で、マルクスの価値から生産価格への転形の方法というのはおかしいんだと、間違っている

と、そうしてこういうふうになさなくちゃいけないんだという、その直し方をですね、数学を使いまして、連立方程式を使いまして、それを提示したんですね。で、スウィーザーはそういうボルトケヴィチのマルクスの修正の試みというのはマルクス経済学にとっては批判ではなくてむしろ貢献であり、マルクス経済学がこれを正当に評定しなくてはいけない、と前向きに高く評価したんです。ボルトケヴィチのその論文をスウィーザーはわざわざ自分で翻訳して有名なベーム＝バヴェルクのマルクス批判と一緒に出版しているくらいです。スウィーザーはそのボルトケヴィチの問題提起は正しいと認めた上で、これをマルクス経済学の一つの前進だとみて、自分の本の一章を割いてこれを紹介したというのが、その論争の発端になったんですね。

そのボルトケヴィチの論文というのは20世紀の、1906年か7年くらいに書かれている。そこでは重要な論文が2つあるんです。それらはほぼ同時期に別々の雑誌に書かれているんですね。ひとつは、数学をあまり使わない、非常に叙述的な論文なんです。大部でどちらかというとマルクスに対してかなり包括的な批判を行っています。それからもうひとつはほとんど数式ばかりを使った論文なんです。内容的には貫く論旨はほぼ同じなんですが、後の論文の方が転形問題に即した話になっています。スウィーザーはそういう論文を1907年ですか、ボルトケヴィチが発表したにもかかわらず、ほとんど誰もそれに注目しなかった、ごく少しの専門家以外は誰も評価しなかった、というんですね。だからこれを自分が掘り起こして、そしてみなさんに紹介する、そういう必要があるということで、自分が問題を提起した、と、こういうわけなのです。

確かにスウィーザーのいうように、ゼロではないんですけども、ほとんどの人がこのボルトケヴィチという人の業績を無視していたわけですね。ボルトケヴィチのこの論文を無視していた。マルクス経済学だからということではないのですが、ドイツ語で書かれていたということもありますから、アメリカ人やイギリス人は読みはしませんし、そういう点で、評価されなかったということもあるでしょう。また、ある意味では些末な議論細かすぎる議論だと始め考えられていたのかもしれない。それで、ほとんど議論はされなかった。

ですけど、日本では意外にこのボルトケヴィチの論文というのはみんな読んでいたんですね。あとで又お話ししますが、戦前にちゃんと読んでいた。それに関する日本の研究というのはけっこうあったということが、私が転形問題を研究している過程でわかったんです。

ここでちょっと自分のことをいわせて頂きますが、私はこの転形問題というものを實際上日本で最初に扱った一人であると自分では思っていますけれども、それは戦後を出発点としての話です。又、実際、スウィージーの問題提起からすれば戦後から始まったというよりほかないのです。でも、それは今言いましたように、日本では戦前の蓄積はあったんです。そういう戦前の日本の研究の蓄積から戦後は断絶しているんですね。戦前のそういう研究っていうのは、反マルクスということで、もうブルジョア的な研究ということなんですかね、マルクス経済学者にとっては、それはマルクス批判家たちがやっていた研究だったものですから、戦後は全然相手にしない、読む気も起こらない、こんな本があることに気付きもしない、戦後の日本の中では、戦前の研究はまったく無視されていた。戦後スウィージーというアメリカのマルクス経済学者が取り上げたものですから、若干の興味をひいたんですけども、みんないったいボルトケヴィチとは誰なのか、何が転形問題なのか、さっぱりわからなかったというのが当時の実状だったと思うんです。それは私自身の経験から言っても間違いありません。戦前の状況を少しでも知っていれば論争の受け取り方も違っていたと思いますね。ですからスウィージーの本の翻訳は先にも言いましたけれど、戦後、かなり早い段階で出版されたのですけれども、その第七章が特に問題になったということはなかったと思います。ただイギリスでウインターニッツやメイが登場して論争になってくると、日本でも何人かの人がそれに関心を持って紹介を書くという具合でした。ところがその論争の意味が分らない。ボルトケヴィチ＝スウィージーの問題提起の意味が理解されないままだったのだから仕方がないのですね。1956、7年頃の日本の状況はそうだったのです。

そこで、転形問題と私の係わり合いですけれども、私は1955年に大学院に進学しましたが、大学院に入って2年後には修士論文というの

を出さなくちゃならないということで、玉野井芳郎先生、もう亡くなられた先生ですけれども、当時先生はまだ助教授で、私はその玉野井先生のもとで研究することになっていました。私の指導教授は宇野弘蔵先生だったのですが、私が学説史にも興味があるということで、玉野井先生が自分のところに来いといわれたわけです。それで玉野井先生はこの転形問題というのはいったい何だろうか、これを一緒に研究しようということで、私も研究を始めたわけなんですね。本当は一緒に研究するというより、私は最初ただ一方的に先生に指導されていた、という感じです。私の他にも2年くらい下の学部学生、学部から大学院に入るための論文を書いている学生も何人か指導されていました。そういう論文のテーマに転形問題を題材にしていた学生が私の知っている限りでも2人ぐらいいまして、その論文を書くにあたって私もけっこういろいろ先生と一緒に相談をしたり助言したりした記憶があります。私はそういうことを契機にして、この転形問題の研究を始めたというわけです。私自身は不勉強でしたから、学部の時にはそんなことは考えたこともなかったんです。だから大学院に入ってすぐ始めたんですけど、なかなか難しく、考えがなかなかまとまってくない。研究を始めた頃に、私が知っている限りでは、論文が二つありました。正確には同じ人が同じような論文を二つ書いていたので三つということになりますが、ともかく日本の大学の紀要に書いた論文が二つほどあったんですけど、その論文はまったくピンボケというか、転形問題とは何か、まったくわかっていない人たちが書いているとしか思えないものだったですから、それは私にはぜんぜん役に立たなかった。それで、ポルトケヴィチそのものを読むしかないだろうということだったんですけども、何しろドイツ語なものですから、なかなか進まないし、また数学の使い方がですね、そんなに難しい数式ではないんですけども、数理的に解くということ自身があまり慣れてなかったものですから、マルクスの弁証法となじみにくく、計算自体は分っても、正直近づきにくかった、ということです。

ところが、そのうちにですね、先ほどポルトケヴィチに二つ論文があると言いましたけれども、その二つの論文のうち的一方の論文というのは実は、戦前にすでに翻訳があったのに気が付きまして、これ

を持っている人間を探そうということになった。東大の図書館にもなくて、経済学部の研究室にもなくて、困ったんですが、誰かが持っていた。家にあったというんですね。それをみんなで回し読みするっていうことをしたんです。私はそれがいつ頃だったか記憶がないんですね。というのは、回し読みしていた仲間の中に私の二年下の院生がいたから、もしかしたら私がもう論文を書いたあとだったのかも知れません。その頃になるとみんなが転形問題に興味を持ってきましたからね。その翻訳の日本語そのものは結構ちゃんと訳してあるんですけど、数式が誤りだらけで、数式が間違っているというのは、訳者でなくたぶん印刷屋の仕業だろうと思うのですけれども、めちゃくちゃになっていたので、全部数式上の誤植を直したんですね。しかしそれにしても、それはスウィージーが直接使っている論文ではないものですから、結局スウィージー本人の使っている論文を読まなくちゃならないのは当然ですね。それはそれで読んだのですが、そちらはスウィージー自身で英訳したものが、ベーム・バヴェルクのマルクス批判と一緒にすでに刊行されていたので、ドイツ語の古い雑誌を読むにも大分助かりました。それで私は修士論文のために準備して一生懸命に書いたのですけれども、一年半くらいの努力では間に合わないのですね。結局、私は指導教授が宇野弘蔵先生だったんですけれども、転形問題の論文の方は期限に間に合わなくて、別な、リカードについての論文を平行して書いていたものですから、それを提出してなんとか通してもらった、という話になるんです。

こういうお話をすると、何か全然別なことを同時にやっていたように思われるかもしれませんが、実際には、リカードとマルクス、そしてポルトケヴィチというのは、互いに非常に関係が深い存在でありまして、ポルトケヴィチというのは実は極端なネオ・リカーディアンなんです。マルクスとリカードを比較して、両者が食い違った場合には必ずリカードが正しい、という。のちのスラフファはネオ・リカーディアンの代表的存在ですが、ポルトケヴィチもある意味ではネオ・リカーディアンの出発点を与えた人でありますから、その系譜に遡ってつながるといえないこともない。でも極端なネオ・リカーディアンであって、マルクスとリカードと展開の違うところは、リカー

ドがいつも正しくて、マルクスはいつも間違っていると、そういうふう
に書いている人なので、そういう点で言うと、やはりリカードをや
ることとマルクスをやることとは、ボルトキューヴィチの主張を吟味す
ることとももちろん大いに関係がある。ボルトキューヴィチのマルクス批
判は、リカードを取り扱う場合にも大いに役立つわけなんです。

そういう点で関係があったものですから、リカードについての論文
も何とか急いで書いて、それを修士論文として提出して、他方で、そ
の後こつこつと、又、宇野井先生と相談しながらボルトキューヴィチの
論文について、それとマルクスの説明との関係について検討して、何
とか論文を書き上げたんですけど、12月の提出期限を過ぎて、あと
1ヶ月くらいもかかっていたから、当然、修士論文の副論文にも
ならなかったんですけども、それを宇野先生に読んでいただいたん
です。博士課程に進学してから、宇野先生のゼミでその内容の概略を
報告しました。それで宇野井先生に勧められて最初に活字にしたの
が、その論文だったというわけなんです。そういう過程を通して転形
問題について、やっと自分なりにある程度の理解の枠組みが出来たん
ですね。それがなぜ出来たかっていうと、宇野理論とか、宇野先
生の『経済原論』を詳しく読み込む中で、あるいは宇野先生と研究室
でいろいろ質問する中で、なんとなくまとめていったわけなんです。
といっても、もちろん「転形問題」は宇野先生になじみのない問題で
したから、始めはなかなか分っていただけなかったのだけれども、結
局は、宇野先生の考え方の中に、ある意味での解決する糸口を与える
ような、そういう基礎があったということが、私にとっては、非常に
大きかったといえるだろうと思います。それは流通形態ということに
ついての先生の考え方だと思います。だから最後には先生にも当然分
っていただいたわけですから。宇野先生ご自身でもその問題はあとあとま
でお考えになっていた問題だったと思います。

それ以後、そういうような考え方は、翌年の宇野先生の定年後は、
宇野先生の後を引き継がれた鈴木鴻一郎先生のもとで一つの理論的立
場として、岩田弘さんの「総過程論」の考え方と融合して、シユール
を成り立たせている一つの要因みたいになっていくわけですから。ずっと
後になって「次元の相違論」という形で、価値と生産価格は次元が違

うんだと、そういうふうに整理され、批判されるようになっていく考え方がそれです。筋道は非常に簡略化していえば、そういうことなんです。宇野派といわれる人がみなそういう考え方であるとはとても言えませんが、少なくとも私はそうでしたし、今でもそうです。率直にいうと、その頃から私は宇野理論から出発しながら自分の宇野理論と違う面を意識せざるを得なくなってきたのです。労働価値説ひとつとっても個々の商品についての等価交換などは否定していましたし、宇野先生の論証方法にも内心は批判的でした。ここではあまりそういうことにこれ以上触れるつもりはありませんが、ともあれ、そういう耳慣れない研究をするということは、自分でいうのも変ですが、当時としては大変画期的だったと思います。転形問題そのものがまだまともに日本では研究されていませんで、外国で始まったことが刺激になって、日本でも研究しようということになっているわけですから、どうしても外国の文献に頼らざるを得ない。外国の論文がみたくて、新しい雑誌が出るのを当時はとても楽しみにしてたんですね。“Economic Journal”が中心でしたが、後になると、“Review of Economic Studies”であるとか、“American Economic Review”であるとか、いろいろチェックする雑誌が増えましたが、やはりイギリスの雑誌が多かったという記憶があります。そういう雑誌に絶えず注目して、新しいものが出ると、急いで研究室の図書室へ行って読んだものです。

ところが、当時の東大の先生の中には研究室のそういう洋雑誌を一人占めにしていて、新しいのが出ると、自分の家に持って行ってしまっ、借りようとしても貸りられないことがある。それで、研究室に行くと、その雑誌は〇〇先生が持っていつているから当分帰ってこないでしょうと言うので、しょうがなく先生の家に行って、「貸して下さい」と言うと、「君はどういう資格でこれを借りに来るのかね」なんて言われて怒られたりする。それでも強引に「貸して下さい、貸して下さい」といつて借りて、そして読んで、また返したりする。そういういきさつがあつて、かえって逆にその先生と仲良くなつたりすることもありました。そういうのも大きな思い出ですね。コピーのない時代には論文を読むのも大変だったんです。

私が大学院に入ったのが昭和30年ですから、当時、まだコピーとい

うのが、何もないんですね。コピーというものが存在しない。アメリカでは少し出ていたのかもしれませんが、少なくともわれわれが実際に使用できる形でコピー機が出現するのが、40年代になってからだったというふうに私は記憶しているんですけど、どうでしょうか。湿式で一度コピーをとってもう一度それを青焼きするという、そういう「リコピー」っていうんですか、あれが最初だったと思うんです。値段もずいぶん高いし、大学に就職した後でもめったに使えなかったような記憶があるくらいで、院生時代にはもちろんありませんから、全部万年筆なんかでノートをとったんですね。ボールペンも使った記憶がない。一生懸命ノートに写してくたびれてしまうのですが、しかし、全部写すわけじゃない。やっぱり必要なところだけしか写さないし、写さなくていいところは写さないということで、実質的には、今のようにコピーは簡単にできるから、コピーだけとって、それでおしまいというのではないですから、昔の方がそういう点では勉強になったんじゃないかという気がします。しかしまた同時にですね、雑誌の種類にしても今のようにたくさんなかったものですから、せいぜい10誌くらいの雑誌をフォローしておけば、大体間に合った、ということもありましたね。日本の雑誌や大学の紀要はもちろん気を付けて見ていたわけですけども、それも研究している人がほとんどいまいので、その後だんだん増えてはきましたけれども、少なくとも始めは少なくてすんだ。

まあそのうち、慶應大学の研究会に呼ばれたり、少しずつ他大学の人も話ができるようになってきて、研究も進んできたんですけども、それでもある程度仲間内って感じで、そういう状況のときは、割に楽しく議論したり研究できたという、そういう記憶があります。そういう点で言うと、現在のような状況、研究者が多くて、文献があふれているという状況でないときの方がむしろよかったと、言えるかもしれませんね。

ところで、私の先生の宇野先生に何度か伺ったことがあるんですけど、あの先生は戦前東北大学に赴任して、何しろ初めて講義するということなので、その時には東北大学の——先生は当時「経済政策」という講義を担当したと言われるんですけど——「経済政策」関係

の本を図書館から10冊か20冊か全部借りてきて、机の上に置いて一冊一冊バラバラめくってみて、面白そうか、役に立ちそうかと判断しながら、読むべき本をその中から数冊選んで、それをちゃんと読み上げる。そういうふうには自分はやってきたんだから、君らもそうするのがいいんだと、何でも読めばいいっていうわけじゃないんだ、ということをお教えされたんですが、しかし、そういう時代とも少し違いました、ましてこういう新しい問題だと、原典はともかく、研究書がなく雑誌論文しかなかったものですから、大体網羅的に目を通しながらやることができました。ただ、今だったら宇野先生に教えられたようにやるしかないでしょうね。何しろ文献は山ほどありますから。そういう意味で昔は楽だったということなのでしょうね。もっとも当時は、研究書がなかった、と今いいましたが、実際はそうでもなかったのです。それについては後でお話します。

ところで、その論争の中で、ミックという、ニュージーランド出身のイギリスの経済学者がいたんですが、玉野井先生と一緒にミックと手紙でやり取りをしまして、議論を進めたというような記憶もあります。ミックは賃金財生産の条件を固定化しようとするもので、玉野井先生はそこに宇野理論との親近性を見たのですが、私はどこをいじっても代わり映えしないと考えていて、ミックを評価できなかったのです。でもミックはとても熱心でしたね。ミックは日本にも来たことがあります、大分前に亡くなりました。しかし、それにしても、議論が生々しいというか、論文が出るとすぐに読むとか、議論できる相手が来たらすぐ会うとか、あるいは外国の人でもすぐ手紙を出して返事をもらって議論を続けるとか、そういう雰囲気はなかなか直接的でもあり、国際的でもあるし、なかなか面白かったなと思います。特に1970年代くらいまではそういう雰囲気を私自身も感じていたし、そういう議論で知っている人が、イギリスに行くと、実際にいたりして、面白かったですね。議論したり、手紙のやり取りをしたり、あるいは自分の本を贈ってもらったりして、そういう同時代に学問的にも国際的に生きているという実感や刺激はあったんですけども、今になりますと、そういうことはもうないですね。

と、いいますのは、私は途中で論争に加わるのを放棄してしまっ

た、ということがあるからなんです。なぜかという、議論が非常に数学的になってきた。数理経済学者の独壇場になってきて、今までのマルクス経済学者はとてついでいけないという状況になってきた。その論争がかなり進行していたときに、『経済セミナー』という雑誌に、森嶋通夫さんが、あのときはまだ大阪大学の教授だったと思いますけれども、見開きの短いエッセイを書いて、我々は、フロベニウスの根というのをちゃんと勉強して、それで転形問題を双対関係として論じてるんだ、マルクス経済学者がちゃんとそんな勉強をしているか、勉強しなけりゃ我々にかなうわけじゃないか、という非常に挑戦的な話を書かれまして、我々も相当それに刺激を受けました。公文俊平君なんか、僕のちょっと後輩だったんだけど、それを読んで、「こりゃあ数学をやらなくちゃいかん」とか言って数学をやり始めて、アメリカへも留学して、いつのまにかマル経ではなくなっちゃったんですけども、そういうようないろいろないきさつがありまして、私はあまり難しい数学が得意じゃないもんだから、何となく論文を読むのが少しずつ少しずつ面倒になり、遅れてきて、そして論文もあまり読まなくなって、他の仕事が忙しくなったということもありますけれども、転形問題の論争からだんだん遠ざかってしまった、そんなことがあるのですね。誰かが私にもわかる形でその後の展開をまとめて整理してくれるのを期待する気持ちもあるんですが、最近のフォーロはしてないことは事実なんです。少し自分でも情けないという気持ちはあります。

しかし今はともかく、以前にそういう転形問題をやっていたということが、71年から10ヶ月ほどロンドンのLSE（ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス）に行く機会があったのですけれども、そのときに役立った。森嶋さんがちょうど1年位前にLSEの教授に就任したということもあって、多いときには一週間に二回ぐらい森嶋さんと会って、3時間ぐらい話を聞く機会がありました。これは私にとって大変ラッキーなことでした。経済学の話も含めてずいぶんいろいろな話を聞きました。転形問題も当然話題になりました。森嶋さんはちょうど、「現代経済学の光に照らしてみたマルクス経済学」というようなテーマで大学院生を教えていたものですから、私と一緒に出ないか

と言うから、私も帰国するまで出席していました。そこで転形問題をまさにやっていたんですね。もちろんそれ以上のことをおやりになっていたわけだけけれど、それもほとんど数学を使ってやっていた。聞いていると少しは分るような気がしてノートもちゃんととって聞いていました。森嶋さんはすでに膨大な原稿をお書きになっていて、そのプリントも全部もらって少しは読んだんですが、やはり数学がなじめなくて理解が十分できない。近経の知識の不十分さはもちろんありましたね。でも非常に精力的にマルクス経済学の問題をおやりになっていたことは分りました。そういういきさつがあって、その後、森嶋さんはその講義をもとにして、『マルクスの経済学：価値と成長の二重の理論』（cambridge university press, 1973, 邦訳、東洋経済新報社、1974年）という本にまとめたんですけれど、この本は非マルクス経済学者がマルクス経済学について書いた理論的研究書として非常に大きな影響を世界に与えたものです。そういう本を執筆するそういう時期にあたって、ちょうど私がロンドンにいたということが、私にとって印象的なんですね。森嶋さんのこの本を開くと今でもなつかしい気がするのとはそういうことがあるからなんです。私はもともと宇野先生にマルクス経済学の日を開かされたわけで、先生を今でも大変尊敬しているのですが、別な意味で、私は森嶋さんにずいぶんいろいろなことを教えられた気がします。イギリスで何かとお話をうかがう中で経済学の方でも刺激を受け、ワルラスを勉強しようと思ったこともあったのですが、帰国後はそれもかなわず、経済学の点ではあまり教えを生かせなかったのですが、その他の点では本当に学ぶところが多かったんですね。どんなところにも全力を投入するその真摯な態度にはいつも感銘しているのですが、森嶋さんと知り合ったきっかけがマルクス経済学とくに転形問題であったというのが、私にとっては運命的だったということでしょうか。

ですから、森嶋さんを含めて私としては転形問題論争は非常にコンテンポラリー—というか、同時代的で、日本人が日本語でやっているんだけど、外国でもやっぱり同じようにやっている。そして話が段々々々、公式的なマルクス経済学から離れて自由になってくる。どんどん自由な発想で外国人たちがやり始める。そこにまた我々がやって

いる公式的なマルクス主義ではない宇野理論と共鳴するところが出てくる。全然環境も何も違ったところで理論が並行的に進んでいくということ、同じような結論に向かって進んでいくということはわくわくするような現象ですね。で、その頃の議論は、私だけじゃないけれど、私どもにとって、大変興味深い論争だったと思えてならないのです。私などは、正統のマルクス主義者からすれば、枠の外に出てしまっているものですが、暫くあとのことですが、東大の伊藤誠君が、日本にも同じような考え方のものがあるよといって、彼の友人のLSEのデサイ氏に紹介してくれて、彼から出来たての著書を贈ってもらったことがあったり、又その他の若手のイギリス、アメリカの経済学者と文通したりして、本当に同じ時代を生きているという活発な雰囲気があって、とても印象的な時代でした。

それで私どもが研究を続けていくそういう過程で、いろんな現物の、先ほどドイツ語で読むのが大変な古い雑誌があると申し上げましたけれども、そういう文献の現物の探索ということが結構大事な仕事でした。戦後、その論文が英訳されているという話を聞くと、絶対に必要なものとはいえないのだけれど、なんとか入手しようとして、非常に苦勞したんですね。外国で引用されているとどうしてもページ数を見なければならぬ。とにかくその頃は現物がなければ話になりません。今みたいにコピーして送れというわけにはいきませんからね。1952年に発行された英語以外の言葉で書かれた論文を載せた“International Economic Papers” no.2 という雑誌なんですけれども、これがなかなか手に入らなかったという記憶があって、ここに現物を持ってきました。懐かしい本です。実際にはドイツ語の雑誌にあるものを——それも全部でなくて一部ですが——ただ英語に直しているだけのものですから、あんまり実質的に意味はないんですけども、文献の収集というのは一種特別な気持ちですね。

それからさらに文献の話になりますが、玉野井先生の編集で『マルクス価格理論の再検討』（青木書店、1962年）という本が出ています。転形問題を比較的自由に扱っている本だといっていいでしょう。私が第一部の中の第一章、第二章を書いているんです。それで、第二部から第三部になると、どんどんマル経色が消えてきて、第三部には中村

隆英氏とか村上泰亮氏、そういう人たちが書いていまして、内容が完全に近経になってくるんですね。で、ある人が言うには「お前が一番だめで、だんだん後になるほどよくなって、最後が一番いいというのだったら、そういう形式の論文集なんておかしいじゃないか」というわけで、私も大分困りました。ただ、この本を出すときにちょっとしたごたごたがありまして、そのいきさつは省きますが、私にとっては、苦い思い出を含めても、いまや非常に懐かしい本です。

それから、これは冒頭でも少し紹介したのですが、『論争・転形問題：価値と生産価格』（東京大学出版会、1978年）という、そのものずばりの題名の本ですけれども、これは従前の転形問題論争に関わる主要な論文を翻訳して提供し、日本での論争に役立てようと意図したものです。友人の山口重克君と伊藤誠君と三人で編集して作った細かい論文ばかりの論文集なんですけれども、自分たちで翻訳したり、大学院生に手伝ってもらったりして、日本人向けに論争論文の編集をしたということです。最後に編集者で手分けして、解説も書きましたけれども、そんなことをやって、転形問題について、だいたいいろいろ材料を提供する仕事はしたという気がします。

この本が出たのが78年ですから、もう23年経っていますね。ですからこの時期にこの本を書いて手伝ってもらった大学院の学生たちは今みんな中堅の教授、助教授になっていますし、時代の変遷が感じられるんですけれども、本当に論争自身もその後は論点が入り交じってしまっていて、労働価値説を否定するマルクス経済学者がいたり、労働価値説というのは、いわゆる商品の価値決定の原理ではないがとても大事なんだ、という近代経済学者がいたりして、なかなか興味が果てしなくなっている。しかし逆にいえば今のマルクス経済学の研究にはこの転形問題の議論はもう絶対に欠かすことのできない問題になっているわけです。マルクス経済学は今そういう大きな論争範囲を問題にしていることになります。

それで、初めの方でちょっと触れましたが、内容的には今までほとんどお話しておりませんでした転形問題についての戦前と戦後の断絶ということがあるんですね。これはマルクス経済学の研究が戦前ではできませんでしたので、マルクス経済学の批判的研究はできたものの、

事実上そこでマルクス経済学の研究はもう、ストップしていたわけですね。ですから戦後は、研究は、言ってみれば、初めからやり直したようなものです。もちろん河上肇さんであるとか、榊田民蔵さんであるとか、そういう人たちの研究を下敷きにしてではありませんけれども、初めからマルクス経済学を原点に立ちかえて、例えば『資本論』とか『帝国主義論』から直接学ぼうということで、戦後は出発している。理論的水準は戦前を完全に抜いている。ましてマルクス批判家など問題にならない、というわけですね。

そして、その結果として、この転形問題みたいなのが出てきてですね、外国もそうだけど、日本でも転形問題論争というのはこのあとどんどん行われるようになりましたが、それは正統的な立場からこの転形問題自身を否定する、そういう立場もありますし、転形問題の曖昧さを批判する人もおりますし、いろいろ条件を設けて計算しなおそうとしている人もいるし、いわゆる次元の相違論といわれている私自身からしても、それで決着がついているとは思えない問題なので、いまだに論争が続いているわけですけれども、そこに戦前のわが国の業績が登場したことはまったくありません。この戦前と戦後の断絶という点が、私にとっては非常に研究していて面白かった問題なんですね。

それで、先ほど言いましたように、ボルトケヴィチという人はもともとドイツの人じゃない、ポーランドかなんかに生まれてロシア人になったのですけれども、やがてドイツにきまして、そしてベルリンの大学で統計学の教授になった人なんです。統計学者としては非常に名高い人で、少数の法則とか、そういうものについての業績は非常に大きいといわれているのですけれども、他方で、経済学者としてもいくつかの論文を書いて経済学的な貢献もしているんですね。その過程でここで取り上げた問題が出てきているわけなんですけれども、ボルトケヴィチが扱ったのがマルクス経済学だったものですから、大きくは評価されなかったのではないかと思います。価値と生産価格との関係についての形式的な問題の扱いは、マルクスの地代論を扱うときも同じでしたから、彼の経済学の理論的貢献というのは、どちらかというところと些末な批判として受け取られたということだったかもしれません。しかも特に大きかったのは、ドイツ語で書かれていたというこ

とだろうと思います。

ご承知のように、今ではドイツ語で論文をドイツ人は書いていませんね。みんな英語で書いています。ドイツ語で書いたって誰も読まない。フランス語で書いても、イタリア語で書いても、あるいは日本語で書いたってもちろん国際的には通用しない。ですからまあ、やむを得ず、英語でみな書くようになっていきます。アメリカ人の学者、イギリス人の学者は英語しかできない学者が多いですけど、それでも圧倒的に有利ですよ。ただあの連中はちょっと勉強すれば、フランス語、ドイツ語はすぐ読めるようになるだろうと思いますけれども、面倒がって普通はそういうものは読まない。たぶん戦前はそんなこともないとは思いますが、ただやっぱり何といても、わざわざドイツ語の論文でマルクスなどという人についての批判など改めて読もうという気はなかつただろうと思います。

ところが、日本はですね、ドイツ語の文献については非常に関心があって、ドイツ語の文献をよく読んでいます。旧制高校ではドイツ語をよくやっていた。日本ではマルクス経済学の研究が大正時代から昭和にかけて、思想的潮流もあって非常にさかんでしたから、マルクス主義関係の書物がよく読まれた。マルクス経済学だけではなくて、マルクス経済学批判の文献も日本にはたくさん入ってきましたから、それもよく読まれた。そして結構難しい論文も翻訳されているケースが多かったですね。本当にびっくりするほど翻訳がよく出ている。たくさんの方の関心をよんでいたんだだろうと思います。

ですからこのポルトケヴィチについても、戦前、例えば京都大学の柴田敬氏であるとか、あるいは高田保馬というような人がちゃんと紹介していますね。それから、これは非常に珍しい本なんですけれども『マルクス価値論の新研究』（桑原博隆著、時潮社、1936年）という本があります。昭和11年に出ているんですけども、この本の中で著者はポルトケヴィチの議論を非常にくわしく紹介しているんですね。というわけで、ポルトケヴィチは、外国では、特に英語圏ではあんまり紹介されていないとしても、日本では逆に非常に広く紹介されている、かなり研究されている、ということがわかるわけです。論文でもいくつもあるんですね。内容的にそれが役に立ったという印象

はないのですが、柴田氏とか高田氏といった錚錚たる学者がのちの転形問題をそれなりに論じていたということが、面白かったと思うわけです。又、そういうことを知っていれば、戦後の転形問題論争の取り組みももう少し早かったかもしれないという気がします。

もっともここでひとつだけ例外があるということをいっておかなければならないかもしれません。転形問題について、戦後の業績がはじめはなかったということを申しましたけれども、唯一の例外があって、それが置塩信雄さんの「価値と価格」という論文なのです。1951年に神戸大学の紀要に発表されたという時期から言っても、その論文の先見性は注目に値するといっているのですが、ただそれは当初の、狭い意味での転形問題に関わるものではありません。ただいいたいのは、置塩さんのこの論文は戦後、まったく突然に出現するんですけれど、そこに、私は戦前の伝統を感じないわけにはいかなかったですね。戦前の蓄積があって、それを新しいツールで現代につないでいく新しい発展を強く感じたということなのです。置塩さんはその後、転形問題論争の過程で外国人にも理解できるマルクス経済学者の代表的な論客の一人として内外の多くの支持者を得ているのですが、ここではあまり内容に深入りしすぎることになるといけないので、これ以上は触れられません。

それで前の桑原氏の著書に戻りますが、私はそんなの読んだってしょうがないよなんて友だちに言われましたけれども、古本屋でこういう本を探してきては、読んで、あんまり役には立たなかったんだと思いますが、学者の営為というものは感じる事が出来たと思うんです。桑原という人は「はしがき」で、この本は外国で書いたって言ってるんですね。外国で書いた原稿を日本で本にしたんだと書いていますから、この人は外国へ留学なり何なりの経験のある人だろうと思っています。この人がどういう人か私は全然知りませんが、したがって外国で刺激を受けて書いたのかどうか分かりませんが、ともかくそういう研究を昔行っていた、という事実が残っているのです。

前に出てきた柴田敬氏だったかな、転形問題ではありませんが、この人のマルクス経済学の理論を批判的に扱った論文は戦前に京都大学の『論叢』で発表されていて、その英訳が外国で多少取り上げられた

という事実があります。しかしそういうことは戦前は例外的で、それが特にマルクス批判でしたから、日本でほとんど誰も問題にしなかったということがありました。転形問題に戻っていいますと、やはりドイツ語で書いているナタリー・モシュコフスカという人がいるんですが、この人の論文も戦前の日本の学者たちがやっぱりこつこつと取り上げて研究している。ところがそれが、戦争で中断されてしまっていて、そういう戦前の遺産というのがなくなってしまった、したがって問題意識というものが全然継承されていない、これは何もこのことに限らずほとんど継承されていない。理論の継承が文化の継承のようになっている、だから簡単に戦前が否定されてしまう。これがマルクス経済学のせいなのかどうか、よく分らないけれども、それが面白くなって思います。それは今でもある、昔のことはすぐ忘れる、というのと少し違うかもしれない。

ただ少し昔のことはすぐ忘れるということはよくあるんですね。不勉強といわれても仕方がない。これはマルクス経済学の、今いった転形問題に関することだけじゃなくて、他のいろんな業績もすぐ忘れられるのですね。拾い出していくとたくさんあるんですけども、そういう業績をあまり誰も研究しないですね。それはもう、本当にひどいもので、我々が大学院時代、今から40年も前に研究していたことも、今の若い大学院生なんか知らないのか、知っているのか、わかりませんが、ほとんど無視しますね。文献なんかの引用なども全然しないことがあります。そしてまた同じようなことの繰り返し、我々の大学院の時代にやった研究テーマをもう一度取り上げ、また、同じようにいまだに繰り返しているっていう、そういうことが目立ちますね。一体、文献を利用するっていうときにどういう利用の仕方をしているのだろう、そういうものを黙って下敷きにして書いているのか、あるいはそういうのを全く無視しているのか。書いた人間には自分のことは直ぐわかりますから、剽窃とはいわなくとも、あんまり無視されると腹が立ちますね。確かに文献が非常にあふれている時代ですからいちいちチェックするのが大変だとは思いますが、今までの業績を踏まえてそれを整理し、評価して位置付けていかないと、やっぱり新しい業績として認められることにはならないだろうと我々は思います

けれども、どうなんでしょうか。

ともあれ戦前であれ、何であれ、過去の業績があったとすれば、やはり我々は、そういうところを掘り出してですね、それに新しい知見を継ぎ足していく、それが本来の役割だろうと思います。もし適当に利用しながらその典拠を隠すとすれば最低ですね。読むとそういうことは案外よく分かるものなんです。それに党派性みたいなものが絡むことが今でもありますね。信じられないことなんです。私などは宇野理論だということで、意識的に最初から検討の対象からはずされることがあります。同じようなことを外国人が言うと、注目される、ということになる場合がありますが、宇野派では駄目ということなですね。本当は自分が宇野理論かどうかなどということは、私自身もう気にしていられないのですけれどね。でも、そんな私のものなどでも読んでいるということは分る。面白いですね。

私は前にいったように、宇野理論というものをベースにして転形問題をやったわけですが、その際にもやはり宇野理論そのものの原型は戦前のものでありまして、そして宇野理論そのものが戦前のそういうさまざまなマルクス経済学者たちの論争の上に成り立った理論的な構築物でもありますから、そういう積み重ねというものをやはり大事にしていきたいという気持ちがたえずあるのです。理論の業績というのはほんの1ミリでも半ミリでも、それまでの先人の業績にちよつとでも加えるということがとても大事なわけで、フレームワーク自身がガラガラと変わるような、そういうグランドセオリーというようなものはなかなか構築できるものではありませんから、普通はやはり文献を整理検討し、それに一つずつ評価を加えて、さらにその上に何か新しいものを付け足していく、そういうことの役割、重要性というものは非常に大きいんじゃないか、と考えるわけですね。そういう点でいえば戦前の研究を無視してはいけません。たとえ結果的には新しい意味がなかったとしてもです。きちんとした手続きとして必要だということです。日本でもそうですし、外国でもそうですけれども、どんな研究でも無視してはいけませんとつくづくそう思いますね。

それで、たまたま、比較的最近ですが、イギリスの“Economic Journal”の百年記念かな、そこに高名な世界中の経済学者に記念論文

を書かせるという企画がありまして、森嶋さんに面白いよと教えてもらったのだから十年以上前ですかね、そこに、フリードマンだったかな、誰かが書いているんですけどね。今の人は全然昔の人の書いた論文を読まない、ちゃんと前に書いてあることをフォローしないで無視してしまう、それで次のことをどんどんやっていく、そういうことをちょっと皮肉っぽく書いてありましたけれども、私もそう思いますね。特に文献というのは最近出た新しい文献にどうしても注目するし、新しい文献は我々にとっても関心が深いものですから、こういう論文が出たよ、こういう本があるよ、これを見なさい、あれを見なさい、とよく学生なんかにもいうんですけども、その前の昔のものもやっぱり重要で、そういうのをあとの人が見落としている、ということは実によくあるわけですね。直接見えなくても、読んでいて別のヒントをえられることもありますね。新しい発見にとって、そういうことはとても重要なんですよ。

この転形問題自身が実はそうなんであって、マルクスが『資本論』を書くときに、ちょっと見落とした、あるいは見落としてはいないのだけれども、あいまいにしたまま残したというところが、この問題の発端なんですね。マルクスがもっとよく考えれば、それなりに解決したかもしれない。しかしもっと考えると、ますます深みにはまって、わからなくなってしまう危険性のある問題でもあった。だからこれ以上やる必要がないといって、マルクスが途中まででやめている、そういう非常に面白い箇所ですね、それはもちろんマルクスには分っていたんだとか、いや十分分っていなかったからポルトケヴィチに隙を衝かれたんだ、とか、いろいろ議論されるわけですが、もとはやはりマルクスの『資本論』の叙述の中にある。そういうように文献を読んでいったときにですね、あとの人がずっとそれを一応理解し消化しているつもりなんだけれども、それでも問題を見逃してしまう場合があるんですね。そういう見逃したところを発掘して、また新しい論点を探し出してくるということが案外多いんです。研究したり論文を書いたりしていると、そういうことはしばしば経験することなんです。何故古い学説なんかを研究するのか、という問いに対する回答もそこにあるわけなんですね。

それで、先に進みますが、この転形問題論争というのは先ほど言いましたように、『資本論』でいうと、価値から生産価格への転形の問題、批判する側でいうと、第一巻と第三巻のいわゆる矛盾というか、あるいは矛盾の解決、または両者の関係を問題にしているわけですが、その問題はボルトキェヴィチの問題提起以前に、実は、大きな問題としてすでに登場していたのです。それは、さかのぼれば、エンゲルスが『資本論』の第二巻、(正確には第二部)刊行の折に、読者に課した宿題、あるいは新しく出した問題提起に端を発してんです。『資本論』をお読みになった方がいらっしゃるかどうかわかりませんが、ご承知のようにマルクスは第一巻だけしか出してなくて、83年にマルクスは死んでしまいますが、その後はエンゲルスが引き受けるんです。そして第二巻、第三巻はご承知のように、マルクスの残した原稿をもとにして、それをエンゲルスが整理・編集して、二巻を出し、そしてさらに苦労を重ねてエンゲルスがその死ぬ前年に第三巻をやっと出すわけですね。ですからエンゲルスが編集して出したのは、『資本論』の二巻、三巻なんです。

それでエンゲルスが第二巻を出したときにですね、これからまもなく第三巻を出すよ、と予告をする。そして同時に、第三巻でマルクスは画期的な問題を提起して、自らそれを『資本論』の第三巻で見事に解決してみせていると。どういう問題か。これは商品が投下労働量によってその価値を決定されるということと、資本家が利潤率均等化を前提とする価格で商品を買取るということがどう関係するかということです。それで価値と価格は矛盾するように見える、ということになる。その矛盾するものをどうやって理論的に解決していくか、これこそがマルクスが『資本論』第三巻で成し遂げる大きな仕事なんだということをおおざっぱに発表してですね、そういうことについてもし誰かが解答できるんだったらやっごらんと問を出すんです。それでエンゲルスの弟子をはじめ、マルクスとエンゲルスの弟子もいますし、マルクス批判家もいますが、とにかくいろんな人が論文を書いて、解答を試みるわけです。エンゲルスが第二巻を出すときに第三巻がすぐ出せるというように思っていたんですけども、案に相違して、第三巻の編集には非常に苦労して時間がかかったんですね。これはマ

ルクスの原稿が非常に不備だったということがあります。で、エンゲルスが自分で継ぎ足さなくちゃならなかったという事情があります。そういう点で非常に苦勞して、10年近くかかってやっと第三巻は94年に出るんですが、予想外に時間がかかってしまったために、いろいろな人がどんどん「こういう解決ができる」と宿題を出してきたんですね。

それに対して、エンゲルスが第三巻の序文でもって、それに採点してるわけです。これはだめ、これもだめ、これはけっこういいところまでいってる、けどだめ、というわけで、結局全部だめで、唯一正しいのはマルクスだけだった、という話が第三巻の序文に出てくるんです。

で、その過程でベーム＝バヴェルクという人が登場してきます。彼はオーストリア学派の創始者というか、創始者はカール・メンガーですけれども、そのメンガーの友人と一緒にオーストリア学派を作り上げた偉大な経済学者ですけれども、その人がエンゲルスの第二巻序文につけた問題提起を聞いて、これは解決することなんかできやしない、これは無理だ、多分失敗だろう、そういう予言をする。したがって第三巻は出せないだろうという予言もするんですけれども、しかしベームの思惑と違って第三巻は出てしまうんですね。出るもんだからベームはこれに噛み付くんです。第三巻は出たけれども、やっぱり自分の予言した通りで第一巻とは矛盾撞着も甚だしい、これはもう全然だめなんだという、そういう論文をベームは書きます。これが有名なベーム＝バヴェルクのマルクス批判の論文なんです。彼は『資本論』の一卷と三巻は完全に矛盾してるんだという話をそこで書きまして、マルクスを徹底的に批判する。そしてこのベーム＝バヴェルクが19世紀の末に書いた論文が、言ってみればその後のマルクス『資本論』批判のプロトタイプになるんですね。最初の決定的な批判として、このベーム＝バヴェルクのマルクス批判論文は、後世に大きな影響を与えるわけなんです。

そのあとマルクス批判というのは続々と出てくる。例えば日本でも小泉信三氏が有名ですが、それはベーム＝バヴェルクの焼き直しだと。他方、ベームの批判に対して、オーストロ・マルクス主義者のヒ

ルファージング——『金融資本論』という本を書いた人ですね——は論文を書いてベームに反論を加える。ベームのマルクス批判は間違っている、と反批判するんです。それはマルクスの価値と生産価格の説明に矛盾はないんだという話なんですけれども、それは価値による商品交換は資本主義以前で、生産価格による交換は資本主義が成立してからだという話でしてね、必ずしも論理的な解決としては成立しがたい弱点の多いものだったのではないかと思うのです。しかしそれもベーム＝バヴェルク流のマルクス批判に対する反批判のプロトタイプになっていくのです。だから、考えてみればベーム＝バヴェルクのマルクス批判、それからヒルファージングのベーム＝バヴェルク批判、これが転形問題論争の出発点を事実上最初に与えたものだった、ということが出来るわけです。そして例えば榊田民蔵氏が小泉信三氏に対して、反批判したのはヒルファージングの反論を下敷きにしてるんですね。それが戦前の状況だった。

ところが、その前のエンゲルスが採点して、これはまあまあだ、これは全然だめだと、判定した論文は、あのエンゲルスがだめだと言ったものだから、それ以後、誰も紹介もしてないし、誰も取り上げなかったですね。研究もされていない。だから特別に読んだ人は別として、誰もどんなことを言っているのか知らなかった。だから誰も取り上げていないし論評もしていない。まあ、私は興味があったので、以前からそういう論文をコピーにとったりして集めていた。一度詳しく調べてみたいと思っていたのですが時間が無い。そこにたまたまですけど、大学院に入ってきた私の学生が、その論文、ドイツ語のを全部読みまして、それを紹介し批判的に評価を下してですね、ドクター論文にまとめた。そしてそれを本にすることができたんですけれども、これがその論争を紹介した初めての業績になったと思うのです。多分、世界でもこれしかないんじゃないですか。かなりの人はその存在は知っていますけれども、エンゲルスが批判してしまっているというだけの理由で、読まない。一種の権威主義に犯されているんですよ。

同じようなことはほかにもあります。マルクスに『剰余価値学説史』というマルクスが過去の学説を詳細に批判した大部の著作があるんですけども、そこでもほとんどマルクスが批判した経済学者はわ

れわれは取り上げないですね。俗流経済学者とレッテルを張られた経済学者を研究しようなどとは誰も考えない。スミスとかりカードはマルクスが評価した人だから、これは大いに取り上げます。ケネーも評価している人だから取り上げますけれども、マルサスであるとかマカロックですね、そういった類の人たちはマルクスが批判したっていうだけで取り上げない、そういう傾向がありますね。確かに積極的に研究する理由が少ないということはあると思います。しかしマルクスが否定したり、取り上げなかった人でも、見るべきところはないわけではないというのが私の経験上の考えです。マルクスが見逃してしまったということもありますし、マルクスが問題を理解できなかったということもあります。そういう経済学者を丹念に拾っていくと、それなりに積極的に評価する点もあることが多い。“Neglected Economists”という論文がありますけれども、そういう無視された経済学説の中にもやはり見るべきところはあるだろう、と思うのです。どっちにしても偏見をもたないことだし、権威に寄りかからないことですね。

再びもとに戻りますけれども、転形問題っていうのはこの辞書の説明にもちょっと書きましたけれども、ある意味では些末な問題から出発しているんですね。価値から生産価格へ転形するといった場合に、価値から転形した生産価格で売られるのは全部の商品なのだから、生産のために購入する費用は価値で計算するというのはおかしいっていうのがポルトケヴィチの最初の問題提起なんですね。買うときはやっぱり生産価格で買うんじゃないか、大体、価値で売っていないのだから価値で買えるはずがない、だから最初のインプットとアウトプットのところが同時決定的じゃなくちゃいけない。そのためには代数でやらなくてはならない。マルクスのいうように算術で計算して、少しずつ修正していくというのはおかしい。連立方程式で同時的に解くことができるならば、これはもう簡単じゃなかったっていうのがポルトケヴィチの始めの問題提起なんですね。

で、スウィージーもそれが正しい解法だとしている。マルクスは算術しか使っていない。代数は使ってない。これはマルクスが代数ができなかったという意味では全くなくて、マルクス自身は代数についての難しい論文も書いています。しかしとにかくマルクスは『資本論』

の中では算術でやってる。だから段々段々価値を小刻みに修正していくという作業をやっている。そうじゃない、うしろのアウトプットが前のインプットに入ってそれで同時的に生産価格に修正される、そうできなきゃいけないとていうのが、ボルトケヴィチの問題提起なんですね。

そして最初はそういうところから出発した問題なんですけれども、数字の計算の単位をどう決めるかで問題が出てくる。労働量で計ると同じでなければならぬのに、価格で表示すると、総価値と総生産価格がイコールになるか、イコールでないかという問題が出てくる。ちょっと専門的になって申し訳ないのですが、価格の尺度になる金の生産条件が中位でないとすると、総価値と総生産価格とは必ずしもイコールにはならない、と、ボルトケヴィチというわけです。その場合、総価値も総生産価格も価格で計っているんですね。マルクス経済学者は総価値が総生産価格とイコールでないはずがない、イコールだろ、定義上そうなる、といわざるを得ない。重大な「総計一致命題」はどうなるんだ、とって大騒ぎになってしまったんですけれども、これは何ていうこともないんですね。両方で使う尺度が違う。一致するもしないもない。従前のマルクス経済学者はは価値を労働量で計算して、生産価格も労働量で計っている。当然同じですね。剰余価値の配分が変わっただけだから。しかしボルトケヴィチの方は金を尺度にして価格量として計算してるんだから、もともと尺度が違う、タームが違う、当然、同次元でないと比較できない。そういう問題なんですね。もちろんその先どう考えるかという問題になるんですが、騒ぎがなかなか面白くて、マルクス経済学者の意表を突くというか、マルクスの意表を突くような問題提起だものだから、みんなどうしていいのかわからなくて、困っちゃった。流通形態論の理解を通じて、価値概念とか価格概念について、宇野先生から十分学んだことが、そのとき問題を把握するのにとても役に立ったという印象が私にはあります。

転形問題そのものは、そういう話が始まりなんです、最近の議論はもうそういう問題から離れてしまって、マルクス経済学とはいったい何なのか、マルクス経済学の課題は何なのか、近代経済学との関係

はどうなるか、そんな議論になってきている。マルクス経済学なんてもういらないんだってというのが、例えばサムエルソンなどですね。だけど、議論の中では主流ではない。逆に、現代の経済学の主流ではありませんけれども、ピエロ・スラッファというイタリア人ですね、もう亡くなりましたけれども、この人の理論なんかは大きな影響力を発揮しています。ケインズの友人で、リカードの全集の編集者としても知られています。その人はリカードイアンですけども、リカードの理論に基づいて作り上げられたその理論というのは、意外によくマルクス経済学とつながってくる理論的な組み立てなんですね。近経の需給均衡論とちがって利潤率の均等化を媒介にする古典派的な生産の均衡なのです。もちろん労働価値説もないし剰余労働も説かない。物量体系に基づく価格体系がその特徴です。だけどその影響は現代のかなりのマルクス経済学者に及んでいます。労働価値説は不要だと考えるマルクス経済学者も少なくとも外国では増えています。また生産価格を価格機構と考えると従来の価値論との整合性をつけるのは難しくなってきました。そうしたとき労働価値説はどうなるのかという問題が出てきます。マルクス経済学とはそれでは一体何なのか、という問題に帰ることになります。こういうふうにと考えると、まだまだ終わるような、決着がつくような、そういう議論じゃないに思います。非常に問題が多岐にわたっているものですから、取り上げる主題によって、説明できないこと面倒なことがどんどん出てきて、混迷しているというのが、現状じゃないかと思っているわけです。

そういうことで、非常に議論の範囲が広がって行って、文献はほんとに無数にありますね。ですから転形問題だけとってみても、コンピュータで検索してみると、たくさんの学者が自分のホームページを開いていて、そこでいろいろやっているから、本当にもう見るのが面倒くさくなる位たくさんあります。だから論文の数は間違いなく増えている。昔のように論文の数が少ないと、それを一応全部読んでフォローしながら自分で考えていくことも出来たのですが、時代も全然変わってしまっているんで、もうそんなことは出来ない。果たしてどっちがいいのかなっていても、もう時代は選べないわけですから、そういう情報の波にもまれながら、必要な情報をえらんで、学んでいくし

かないように思います。

私のように、価値論や生産価格論には依然興味は持っているものの、いわゆる転形問題論争への参加は途中でやめてしまった人間が言うのも変かもしれませんが、外国でも日本でも関連する論文の数はとも増えています。どうも技術的な展開についての議論が多いような印象で、議論の中身にはあまり進展はないのではないかと、というのが率直な感じ。もっと本格的な問題をやったらどうかなどと私は考えています。例えば、労働価値説はマルクス経済学にとって踏絵のようなものですが、“Marx after Sraffa” (1977) を書いたスティードマンのように、複合生産物でのマイナスの価値というような、従前の価値論では説明できないような事例を持ち出して、間接的にその有効性を批判するのではなく、積極的に労働価値説そのものの意義の再検討をやるべきではないかと私は考えています。

最後に、余談ですけれども、コンピュータ検索、例えば、私は「サクライ」という名前なんですけれども、「桜井」という、略字で書いての桜井、それから「二貝の女が木にかかる」なんて昔から言いましたけれども、古い書体「櫻」ですね、私は両方使って論文を書いています。私が役職に就いたときに名前の書体をどっちかにはっきり決めてくれ、印鑑が欲しいのでどっちかに決めろと言われたので、それ以後古い書体を使うことに決めたわけですが、そうすると署名が違っていると人が違うということになる。コンピュータでは識別できない。同一人なのだけども違う二人がいることになる。それで書いた論文も著者名が略字か正字かで違う人が書いたことになっているわけですね。だから業績を全部集めるときには、両方足さなくちゃならないということがあります。だけどそういうような弊害は、もちろんヨーロッパの言語にもありますから、そういうことは今の検索エンジンを見てみると、どんどん改良されて、そういうことにもちゃんと対応して修正してくれるようになっていくし、これから必ずよくなっていくだろうと思います。だから、そういうこと弊害はあるけれども、どんどんよくなっていくだろう、そういう期待は充分持てるんですけれども、むしろそういうことより、ますます文献の数が増えるだけけれども、どれを読んだらいいのかという、そういう問題が絶対出てくるわけです。

よ。もう既に出ているわけですね。最近の学術書というのは、日本人の本でも、やたらに文献の数を並べるのがはやってましてね、ほんとに読んだとはとても思えないんだけど、文献の数ばかり、ざーっと並んでるんですよ。それはやり過ぎじゃないかなという気がするんです。文献の中でどれが一番だいな文献、まっさきに読まなくちゃならないのはどれか、二番目、三番目にはどれを読むかっていう、そういうことは権威ある先生に聞くとか、先輩に聞くとか、あるいは書物で学ぶとか、いうことになりますから、結局のところ今までのコンピュータがない時代と同じような勉強をしないとだめなんです。文献を選ぶ能力、読む能力、その内容を理解し、評価する能力というものは、いくらコンピュータによる情報検索が発展してもコンピュータ自身では出来ない仕事です。

ですから、コンピュータによる文献検索というのは画期的であることは確かで、この可能性はほんとに無限だとは思っただけけれども、他方で、今いったように、文献をその内容によって選択するということはコンピュータにはできない。将来できるとしても誰かが選んだっていうことであってね、その誰かが信用できるかどうかわかりませんし、信用できるかどうかは誰かが教えてくれるのかということもわかりませんし、結局は自分で現物を読んでみて、そして調べるしかないとなると、やっぱりそのためには自分でとにかく読むんだと。それも先輩とか先生とか指導教授、そういう人に教えてもらうしかないし、そしてまた、自分で文献にあたって、ほんとにこれはいいと思う、これはよくないと思う、というそういう過程を通さないと、本当のことは分らないだろう、と実際思います。

そういうことで、私が転形問題についての論文を最初に発表したのは昭和33年ですから、もう40数年になってるんですけども、その間は文献とか、検索という作業についての、コンピュータの驚くべき発達、もちろんワープロもありますね、あるいはコピーとかですね、そういう機械、道具についての発明というのはもう本当に革命的だったと思います。しかし、それでも研究するのに一番役に立つのは先生の指導であり、先輩との討論であり、先輩、後輩を含めての仲間たちの刺激ですから、情報は量でなくて質ということなんです。そういうこ

とを体験する時期を、ちょうど転形問題やその他の理論的なことなど研究しながら歩んできた私の印象は、環境はすこぶる変わったけれど、それによって研究のやり方はどう変わったのだろうかという簡単な疑問なのです。

だいたい1時間ということでしたので、このくらいでよろしゅうございますか。甚だ簡単なお話で、しかも雑談のようになってしまって、ご期待に添えなかったかと思えますけれども、これで終わりにさせていただきます。最後までご清聴有難うございました。

於：平成13年4月20日（金）私立大学図書館協会文献探索研究分科会